

社会科（地理的分野）学習指導案

1 単元名

「世界の諸地域：ヨーロッパ州～オランダの農業から考えるEUの構造」

2 単元について

現在のヨーロッパを考える上では、やはりEUという構造が重要となる。このEUという枠組みは、当然のことながらヨーロッパ各国の農業、工業などの産業的な分野つまりは経済的な面において大きな役割を果たしている。また、現在ではその構造は政治面、さらには地形や気候的側面など、ヨーロッパの地域的特色を考える上で重要なファクターとなっている。本単元ではヨーロッパ州の大観をした上で、EUの構造に焦点を当て、ヨーロッパの地域的特色を明らかにしていく。EUの構造はまさに学習指導要領における「空間的相互依存関係や地域」の典型事例と考える。その上でその構造に見られる、現在の離脱問題や移民問題、財政や格差、食糧問題といった地球的課題に迫れるよう単元を構成する。特に今回は「オランダの農業」を主題として学習を深めていく。

オランダは現在アメリカに次ぐ世界第2位の農産物輸出大国である。日本よりも国土も狭く、人口もまた農業人口も少ないこの国が、なぜこれだけの輸出大国となっているのか。その背景にEUの構造がある。オランダは輸出用の作物を厳選し、対外的に競争力の強いものを集中的に生産を行っている。その品目はトマト、生花、パプリカ、キュウリなどが挙げられる。その厳選した作物を徹底した施設園芸化、企業管理により一つの工業製品といえるほどのシステム化を行い、生産を進めている。そして、その生産の約7割を輸出している。こうして対外輸出に適した作物を生産し、その他生活に必要な農作物は逆に輸入に頼る。関税を撤廃し、輸送が円滑なEUだからこそとれる方法ともいえる。これは痛みやすい葉物野菜でも、陸上輸送で他国からすぐに運ぶことができるということだ。オランダにとってはEU諸国からの輸入は日本にとっての国内輸送程度の感覚でしかない。これこそがEUという地域の特色と言えるだろう。また、オランダはその国内生産量を上回るほどの農作物を輸入しているが、その輸入した農作物の七割は再び輸出に回る。ヨーロッパの中心部にあるオランダは、農産物の中継地であり中央卸売市場的役割を持つとも言えるだろうか。この構造を活用し、農産物の加工貿易的働きも盛んである。これがさらにオランダの農産物輸出量を押し上げる大きな要因でもある。こうして日本の九州ほどの国土しかない国が、世界的な農業大国として君臨している。

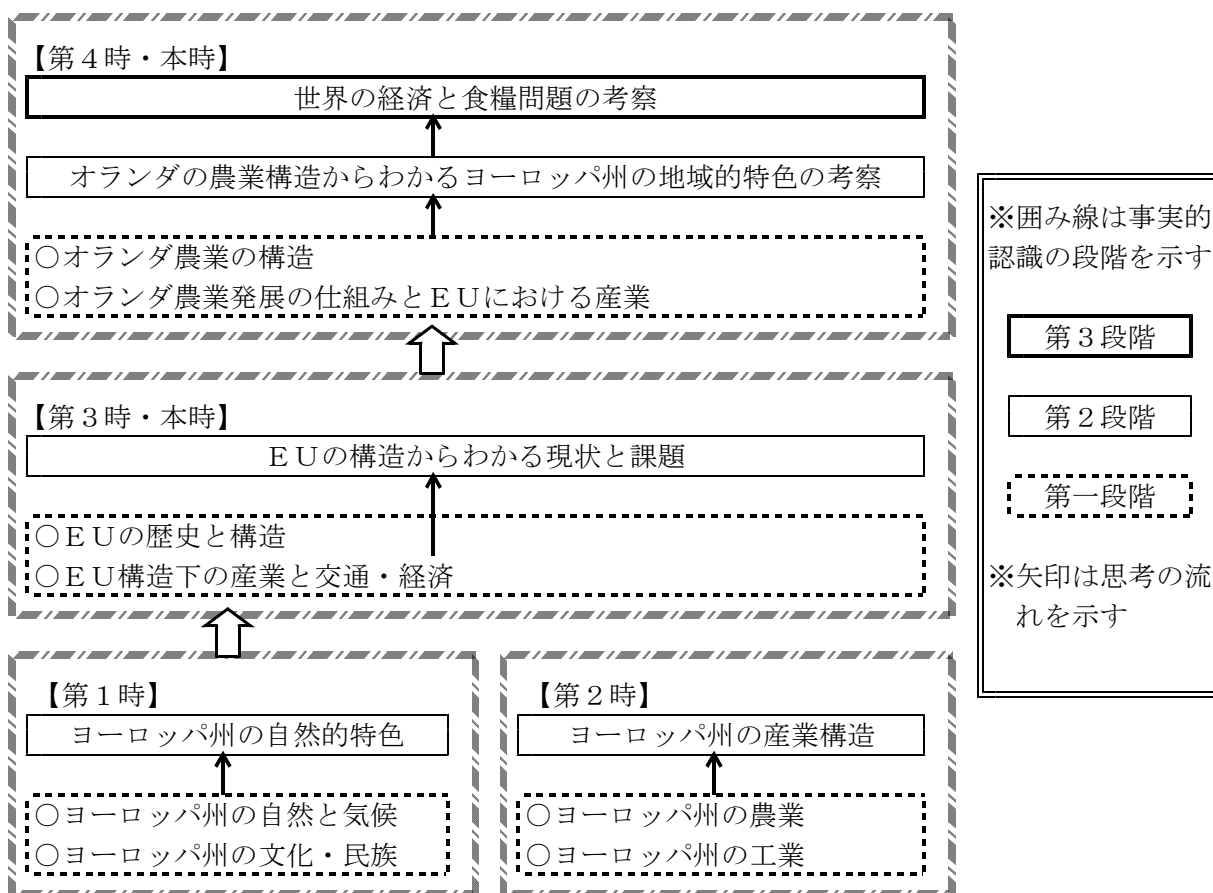
果たしてオランダに比べて日本の農業規模は小さいのかというと実はそうでもなく、総農業生産額でいえばオランダの約6倍にもなる。ではなぜ輸出にこんなにも差が出るのか、一つには日本の生産構造に要因がある。日本は消費者の多様なニーズに対応した質の高い農作物が求められる。そのような生産は輸出競争にそのままでは対応できない。また、海に囲まれた日本の環境にも要因がある。陸続きのヨーロッパとは異なり、痛みやすい作物はなかなか外に頼るわけにはいかない現状がある。しかし、国内で何もかも賄おうという現在の自給率政策にはまた限界がある。現在のグローバル社会に対応した日本農業の展望を考えていく必要がある。

本時ではEUにおける農業構造を主題とし、なぜオランダは農業輸出大国になり得たのかという視点でオランダの農業構造を考察する。オランダの構造を考察することで、EUのもつ利点や問題点を明らかにし、ヨーロッパ州の地域的特色に迫ることができる。またその構造を日本と比較することで、逆にEUの地域的特殊性が見えてくる中で地域を越えた「地域主義」在り方へと結びついていくと考える。そして、同時に日本でも問題化している食品ロス問題に触れることで、現在の世界経済や食糧問題につながる地球的課題としてとらえ、さらに認識が深まることが期待される。

3 単元の目標

- ・ヨーロッパの地域的特色を、地形や産業、文化などの視点から意欲的に追究することができる。 【関心・意欲】
- ・ヨーロッパの自然、人口と民族、産業の特色についてグラフ、雨温図などを用いて読み取り、理解することができる。 【知識・理解】【技能】
- ・政治的、経済的、また歴史的な視点から、EUの構造について考察することができる。 【思考・判断・表現】

4 思考の深化に対応した単元の指導計画



5 本時

(1) 本時の目標

- ・オランダの農業構造について意欲的に考えることができる。
- ・資料からオランダの産業構造を読み取り、地域の特徴を考察することができる。

(2) 本時の「主体的な学び」

①【世界農産物輸出額ランキング】

右の資料は2010年の世界農産物輸出額ランキングである。国土面積も人口も日本の九州ほどの規模しかないオランダがなぜ世界第二位なのか、という視点は生徒の関心を引くものとなる。

【オランダデータ】

名称：オランダ王国

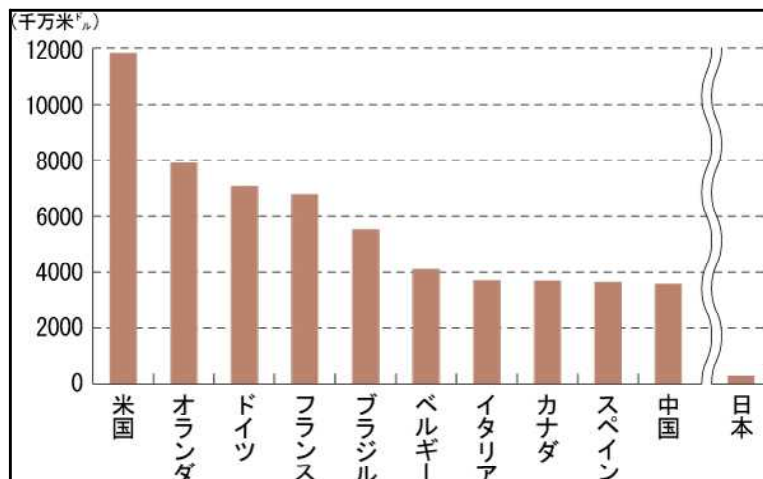
首都：アムステルダム

面積：約4万k㎡

(日本38万k㎡、九州約4.4万k㎡)

人口：約1600万人(日本約1億3000万人、九州約1400万人)

人口密度：約440人/k㎡



②【オランダと日本の農業規模の比較】(農林水産省 HP)

資料から考えてみると、オランダの農業構造が見えてくる。輸出用作物の厳選、またその立地に起因する中継・加工貿易のしくみ、EUという関税障壁のないものの流通の構造、それによって成り立つオランダの農業生活が見えてくる。それこそが、ヨーロッパ州の地域的特色へとつながるものとする。

	オランダ		日本	
	名目額	GDP比	名目額	GDP比
国内総生産(GDP)	8,793	—	46,024	—
うち農林水産業	145	1.7	546	1.2
1人当たりGDP(ドル)	52,129		36,298	

資料：国連統計

すなわち日本にすぐに当てはめて考えることの難しさが示唆される。日本ではまだ国会議員の中でもオランダに学べ、農業輸出の拡大、成長産業として期待する声も多い。しかし、海に囲まれた日本、そのために集中生産の難しいこと、日本人の多様なニーズなど単純な比較は意味がない。TPPもあまりニュースで聞かれなくなってきた昨今であるが、現状はあまり楽観的にオランダに学ぶことは難しいと言えよう。

③【一人あたりの食品廃棄物量の主要国のランキング】(農林水産省 HP より作成)

この資料では農業輸出が多いオランダは同時に「一人あたりの食品廃棄物量」も必然的に多くなるのがわかる。オランダの農業構造、そしてEUの構造について考察する中で、その利点だけでなく、食品廃棄の問題も内包することを考えさせることでより深い理解に結びつけたい。さらにこれは学習指導要領の求める地球的課題の視点にも対応すると考える。



(3) 本時の「対話的な学び」

①【オランダの施設野菜の品目別栽培面積】

右はオランダの施設野菜の品目別栽培面積を示した表である。オランダの上位三品目への集中が約8割に至っているのがわかる。日本との比較からもその集中という特色が見えてくる。

オランダ(07年)			日本(09年)		
	面積	構成比		面積	構成比
トマト	1,845	40.4	トマト	7,536	16.4
パプリカ	1,187	26.0	ホウレンソウ	5,010	10.9
キュウリ	617	13.5	イチゴ	4,631	10.1
その他	922	20.2	その他	28,876	62.7
合計	4,571	100.0	合計	46,052	100.0
集中度(上位3品目)	-	79.8	集中度(上位3品目)	-	37.3

②【オランダの青果物の流通構造】

右はオランダの青果物の流通構造(2007)である。

以下の3点が確認できる。

第1に、輸入量が国内生産量をやや上回ることである。国内生産量は4,386千トンである一方、輸入量は4,450千トンである。なお、輸入された青果物の7割超が再輸出される。

	国内生産		輸入		合計	
	数量	割合	数量	割合	数量	割合
国内消費	917	20.9	1,100	24.7	2,017	22.8
輸出	2,973	67.8	3,227	72.5	6,200	70.2
食品加工業	496	11.3	123	2.8	619	7.0
合計	4,386	100.0	4,450	100.0	8,836	100.0

第2に、輸出量の過半が再輸出ということである。輸出量6,200千トンのうち、国内で生産された青果物の輸出が2,973千トンである一方、輸入された青果物の再輸出は3,227千トンである。

第3に、国内消費量は、国内生産量、輸入量、輸出量より大幅に小さいことである。つまり、オランダの青果物では、輸出向けの国内生産と、再輸出向けの輸入が多いことが特徴である。農産物輸出が必ずしも国産農産物とは限らないこと、および国内消費を大幅に上回る国内生産や輸出入が行われていることは、青果物だけでなく花卉類や酪農製品等、オランダ農業の主要産品にも共通する特徴である。また、オランダはカカオ豆や葉タバコ等の輸入原料を国内で加工し、最終製品を輸出する加工貿易や、冬期に野菜を南欧から輸入しドイツ等へ輸出する中継貿易も行っている。

農林中金総合研究所 HP『オランダ農業の競争力と農産物貿易』より引用

③【オランダの農産物貿易の相手国と貿易額】

右はオランダの農産物貿易の相手国と貿易額(2008)を示している。オランダの輸出先はドイツが約4割、そしてEUで約8割を超えている。輸入も含め、EUという関係の中で行われるオランダの構造が見えてくる。

輸出先国	割合 (%)	輸出額 (10億ユーロ)	輸入先国	割合 (%)	輸入額 (10億ユーロ)
世界計	100.0	64.5	世界計	100.0	40.9
ドイツ	25.5	16.4	ドイツ	20.0	8.2
イギリス	11.0	7.1	ベルギー	13.2	5.4
ベルギー	10.7	6.9	フランス	9.3	3.8
フランス	9.9	6.4	イギリス	3.9	1.6
EU計	81.4	52.6	EU計	60.8	24.8
アメリカ	2.7	1.7	ブラジル	6.7	2.7
ロシア	2.3	1.5	アルゼンチン	3.5	1.4
スイス	1.1	0.7	アメリカ	3.1	1.3
日本	0.8	0.5	マレーシア	2.6	1.1
非EU計	18.6	11.8	非EU計	39.2	16.1

(4) 本時の展開

指導過程	学習内容と活動	留意点
<p>導入 10分</p>	<p>○この国はどこだろう。 オランダと日本、九州のデータを比較する。 ← 主体的</p> <p>○世界農産物輸出ランキングから考える。 ← 主体的</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ワークシートを配付する。 ・スライドを提示する。 ・面積・人口規模の小ささに着目させる。 ・地図帳を用いてデータから考えさせるようにする。 ・白地図からヨーロッパ内の位置も確認できるようにする。 <p>・スライドを提示する</p> <p>【本時の「主体的な学び」 ：①世界農産物輸出額ランキング】</p>
<p>課題把握</p>	<p>どうしてオランダは世界第二位の農業輸出大国になれたのだろうか。</p>	
<p>展開</p>	<p>○どうしてオランダが農業大国となり得たのか、仮説を考え、発表する。 対話的</p> <p>○オランダの施設野菜の品目別栽培面積の資料からわかることを読み取り、ワークシートに記入する。 対話的</p> <p>○オランダの青果物の流通構造の資料からわかることを読み取り、ワークシートに記入する。 ・国内生産、輸入、全体 対話的</p> <p>○オランダの貿易が成り立つのはなぜかを班員と話し合い、発表する。 対話的</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでのヨーロッパの学習（気候・立地・歴史など）からの結びつきを意識させる。 <p>【本時の「対話的な学び」 ：①オランダの施設野菜の品目別栽培面積】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日本の構造との比較から考えさせるようにする。 <p>【本時の「対話的な学び」 ：②オランダの青果物の流通構造】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・データに基づき根拠を持って考えられるようにする。 ・スライドを用いて国内生産、輸入、全体それぞれから考えられるようにする。 <ul style="list-style-type: none"> ・これまでのヨーロッパの学習を振り返り、考えさせる。 ・EUという構造について考えさせるようにする。 ・追加資料 【本時の「対話的な学び」 ：③オランダの農産物貿易の相手国と貿易額】

<p>まとめ</p>	<p>○日本の農業との比較から、日本に取り入れることができる視点はないか考える。 ← 主体的</p> <p>○オランダから見えるEUの構造について追加資料から考察する。 ← 主体的</p> <p>○今日の授業から見えるヨーロッパ州の地域的特色についてまとめる。 ← 主体的</p>	<p>・日本との比較からこの地方的特殊性が理解できるよう考察させる。 【本時の「主体的な学び」 ：②オランダと日本の農業規模の比較】</p> <p>・EU構造の別の視点に気づかせるようにする。 【本時の「主体的な学び」 ：③一人あたりの食品廃棄物量の主要国のランキング】</p> <p>・ヨーロッパの地域的特色としてまとめられようにする。 ・日本の学習や世界の経済構造へつながるように考察させる。</p>
------------	---	--

(5) 本時の評価

- ・オランダの産業構造について意欲的に考えることができたか。
- ・資料からオランダの産業構造を読み取り、EU地域的特色を考察することができたか。

6 思考の構造図

【事実に認識の第3段階】

世界では地域主義的なまとまりによって、政治・外交・経済的つながりを推し進める動きが強まっている。それにより、国際協調や紛争問題解決の平和的側面も期待されるが、経済格差や民族的ナショナリズムの高まり、食品ロス問題などの食糧問題などの側面も表面化している。



【事実に認識の第1段階・第2段階】

- A オランダの農業が成り立つのは、関税の撤廃、人の出入りが自由なEUという構造のためである。
- a オランダはトマト、生花、パプリカ、キュウリなど、対外的に競争力の強いものを集中的に生産を行っている。
 - b オランダは生産した作物の約7割を輸出している。
 - c オランダはヨーロッパの中心に位置し、ヨーロッパの中央市場的な存在になっている。
 - d オランダは輸入した農作物の約7割を再輸出している。
 - e 日本では消費者の多様なニーズに対応した多様な農産物生産が行われている。
- B ヨーロッパは、歴史的・地理的・経済的理由から、EUという政治的・経済的統合が進められ、世界の経済や政治に大きな影響を与えている。
- a ヨーロッパでは戦後、二度と戦争を起こさないようにと、国家の枠を超えた経済協力の動きが進められた。
 - b EU加盟国は拡大を続け、世界の中でも大きな存在感を見せている。
 - c 多くのEU加盟国の間では人々の通行が自由で、通勤や買い物などの交流も容易である。
 - d 共通通貨であるユーロが導入されている。
 - e EU加盟国の間での経済格差や、共通通貨による弊害が問題となっている。
 - f イギリス離脱や各国の民族的ナショナリズムの高まりから不安要素も叫ばれている。
- C ヨーロッパに多くの国が存在するのは地理的・気候的要素から、歴史的に多くの民族が交わりながら発展してきたためである。
- a 他の州には見られない小さな規模の国が多く存在している。
 - b 気候に対応した多様な農業が行われている
 - b ヨーロッパは温暖な気候で、古くからたくさんの文明や国家が形成されてきた。
 - c 多くの言語、多くの民族、宗教があり、小さな国家も多く、紛争になる地域もあった。
 - d 早くから文明が発達し、近代の工業化の中止となり、世界中に植民地を持つ国も多かった。
 - d 二度の世界大戦の中心地域となった。